



与那原町史だより

与那原町教育委員会 生涯学習振興課 町史編纂室

TEL 098-871-9981 FAX 098-871-9982 所在地 〒901-1303 与那原町字与那原712番地



↑与那原幼稚園卒業記念1958年(昭和33)3月13日
区の旧公民館前で撮影。当時与那原には与那原、
浜田、新島、板良敷、当添に幼稚園があった。
(町史所蔵)



← 1958年(昭和33)1月1日、当添幼稚園
の前で園児と先生。場所は現在の当添公
園辺り。
(提供：新垣千鶴子氏)

編纂室より

発刊予定の『与那原町史 資料編 戦後の与那原』では、戦後の行政、まちづくりや景観、産業や人々の暮らし、教育の4章構成を計画しています。これまでの収集・調査資料の中から、各章ごとに内容の一部をご紹介します。また、今年度復元された与那原駅舎と軽便鉄道についてのミニ特集のページもご覧下さい。

きれいな水が届いた日

— 水道事業の始まり —

与那原町の行政が戦後取り組んだ事業の一つに水道敷設事業があります。

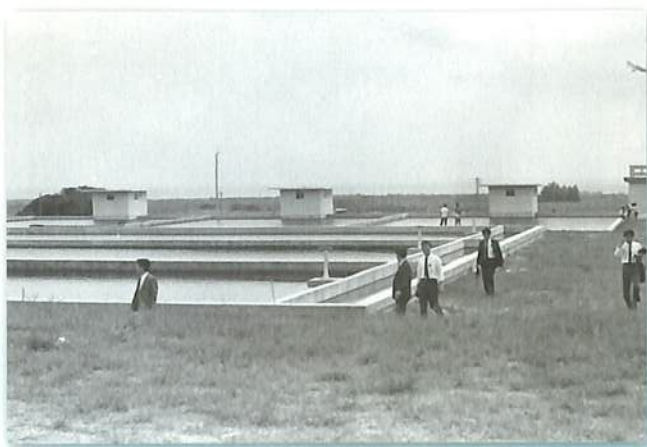
戦後の水事情

戦後の暮らしの中で使用する水は井戸または雨水を溜めて確保してました。

一九六〇年（昭三五）頃から与那原町議会でも水道敷設について議論がなされましたが、当初の町民の意識としては水道敷設への意志はそれほど高くなかったようです。一九六二年（昭三七）三月の定例議会では、「水道がほしいもの↓五五四軒、現在のまま天水↓四六九軒、どちらでも↓一三八軒」といった町民アンケートの結果が発表されています。

しかし、一九六三年（昭三八）に七〇数年ぶりとも言われる大干ばつが起こりました。この年の一年間の

総降雨量は平年の四七・六%と約半分の降雨量でした。



石川浄水場 町職員等による視察

そのため同年六月には本土から水が運ばれてくるほどとなりました（沖縄県企業局工可参照）。

与那原でも飲料水運搬人夫を雇用し、給水車で一日四〜五回ほど運搬を行っていました。

このような歴史的な干ばつに続くように一九六五年（昭四〇）頃から井戸の大腸菌問題、西原製糖工場からのばい煙問題による雨水の汚染な

ど水の確保に悩まされました。

苦勞した水道工事

同じ時期に琉球水道公社が石川浄水場から軍道十三号線（現在の三二九号線）に水道管を通して那覇まで水を供給するという計画・工事が行われました。この水道管から与那原町にも分岐をして水を供給することになりました。

この水道敷設工事が完了するまでには、様々な苦勞がありました。

水道本管が引かれている軍道路内には、各軍施設を結ぶ連絡ケーブルが引かれているため米軍の係官の立ち合いの下でなければ分岐のための工事が出来ませんでした。

さらに、この立ち合いをしてもらうためには一箇所につき五〇ドルの手数料を支払わなければなりませんでした。

また、水道管をこの連絡ケーブルの近くに引いてしまうと米軍が通信する際に水流音が雑音になるとの理由で水道管の設置位置を通常よりも高めに設置せざるをえなくなったこともありました（知念良光氏証言）。

このように特に米軍政府との関わり

工事期(完了年)	行政区
第一期 (1968年末)	港・江口・中島・新島・森下・浜田
第二期 (1969年夏)	与那原・大見武・上与那原
第三期 (1971年春)	当添・板良敷

表1：上水道 敷設時期
（『町勢要覧 1970』をもとに作成。）

※3枚の写真：知念良光氏 提供



（右）中島・港区での工事の様子
（左）設置された水道管 一部は米軍指定の塩化ビニル製を使用しなければならなかった。



りに苦勞しながらも、一九六八年（昭四三）からの三期の工事（表1）を経て安全な水が供給されるようになりました。

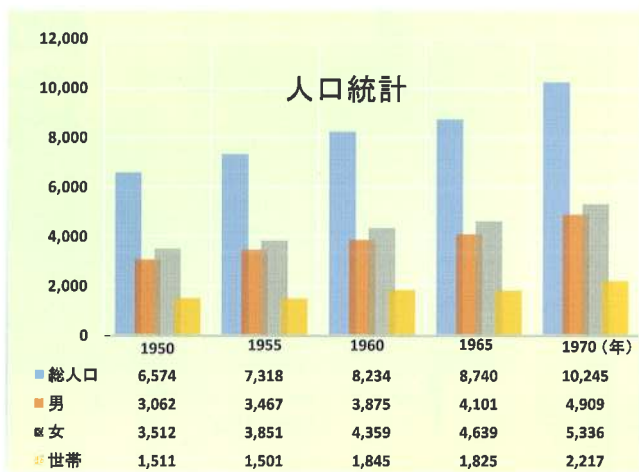


1960年頃の与那原風景

戦後の 与那原まちづくり

与那原町は、一九四九年（昭和二四）四月、大里村から分離したことで全島で当時一番小さな町として誕生しました。それから生活環境施設の整備が進むにつれ人口は年々増加し、一九七二年（昭和四七）本土復帰の年には人口一万人余となりました。

この人口増加とともに進められた都市計画事業により与那原のまちは大きく変化していきました。



道路整備と排水路工事

一九六三年（昭三八）「町道現況調査」では、道路面積六万四二〇・六一㎡、内自動車交通が不能な道路が二千八四〇㎡で全道路が砂利道であることが報告されていました。



「1959年10月指定 道路台帳」より町道及び橋位置図

より、大雨や暴風においての農耕地、住宅の浸水被害の問題も処理されました。

本格的なまちづくりへ

「遊園地構想など」

与那原町本格的な町づくり

与那原町発展の三条件といわれる上水道施設、区画整理および排水溝整備、観光施設が近くそろったことになり、町当局はこれを機に本格的な町づくりに着手する。

「中省略」

こうして与那原町は発展への条件が一応そろったため、都計事業を推進することになったわけで、同町都計の構想は那覇市をふくめた近隣市町村のいこいの町をつくることにあり、関係者はこれを「レジャータウン」と呼んでいる。

一九六五年八月一日付

琉球新報社記事より」

参考文献 町政文書

一九六八年（昭四三）十月、米国政府より町管内の一三号及び四四号軍道路（現在の国道）ともに舗装端から両側に六m拡張され、軍道路横断の暗渠の架設と海岸に向けての排水路の新設が行われました。これに

地図で蘇る商店街

与那原の古き町並みを、皆さんは覚えてますか？

町史編纂室では、『戦後資料編』の発刊に向け、商業地図を制作しています。地図を通して町を見ると、商店街の繁栄と変化が見渡せます。

地図上の店舗位置は、古い広告記事や、商店街をよく知る方々の証言を頼りに、現在調査中です。

この冊子をご覧の皆さんの中に、昭和四十年代以前の、古い広告や、商店街地図をお持ちの方がいれば、ぜひ町史編纂室までご一報ください。

■町史編纂室

098・871・9981

1950年代のえびす通り商業地図 (調査をもとに作成中)



五十年代の与那原町内写真
(Ronald Streepy氏所蔵)

戦後の幼児教育の一步

―与那原の幼稚園―

● 初等学校付属幼稚園

焦土から復興し始めた一九四六年（昭和二二）六月、浜田の旧日本軍兵舎跡に与那原初等学校が設立されました。民政府文教局通知により、校内に付属幼稚園が置かれ、幼児教育も始まりました。

ところが、翌年十一月に米軍政府補助金が打ち切られ、財政状況から沖繩の多くの市町村で幼稚園存続が問題になりました。

一九四九年（昭和二四）三月に学校付属は廃止されましたが、必要な教育機関として町議会でも取り上げられ、財政措置や地域の協力等で継続します。

また、婦人会の働きかけもあり、のちに親川の園舎建築が進展します。

● 字にあった幼稚園

当添では、町なかへの通園が不便なため、一九四七年（昭和二二）頃には字公民館を活用した幼稚園が開設されていました。

板良敷でも一九四八年（昭和二三）頃には、学校教育の経験者へ依頼し、

月曜から土曜まで午前二時間ほどの幼稚園が開設されていました。教材や遊具がほとんどなく、先生方は折り紙や木登りなど工夫して保育対応していました。

どこの幼稚園も政府の認可前で、月謝制などで十分な給料もなく、先生方や地域の熱意と奉仕精神で継続していました。

このほか、与那原区に与那原幼稚園、浜田区に浜田幼稚園などがありました。

一九六七年（昭和四二）、親川の与那原幼稚園が認可を受け教育区立になると、当添や与那原の幼稚園もその分教場として位置付けられました。



友愛幼稚園2期生の修了記念写真
(町史所蔵)

● 友愛幼稚園

与那原の私立幼稚園のひとつが、味噌醤油づくりで知られた山宮友愛社による友愛幼稚園です。社長で園長の故・宮城能章氏が信教したキリスト教精神に基づく幼児教育を目指して、一九五三年（昭和二八）六月に開園しました。

瓦葺きの木造園舎で、場所は江口区、現在マリントウゴルフの入口近くでした。

政府へ認可申請を検討したようですが、一九七二年（昭和四七）、沖繩の日本復帰に際し、本土法規に沿って学校法人となるか現状に留まるか選択を迫られた宮城氏は、深慮の末、幼稚園継続を断念しました。

現在はその後継団体が、社会福祉法人として保育園を開設しています。

● クララ幼稚園

一九五八年（昭和三三）、与那原カトリック教会が設立されました。シスター達の布教活動中で、地域の人々から幼稚園希望の声が出たことが、クララ幼稚園開設のきっかけだそうです。

一九六一年（昭和三六）に、修道院近くの民家建物で開設され、翌年森下区の現在地へ新築移転しました。

初年度は四、五歳児の混成クラスで始めましたが、日常は方言という子どもが多く、シスターが「さあ、おもちゃをしましょ」と声をかけると「シマ？シマーサン（すもうはやらない）」と返されたという笑い話があるそうです。

新園舎移転とともに認可され、第一期生二二名が卒園しました。



教会玄関前で第1回卒業記念撮影
(クララ幼稚園提供)

● 幼稚園教育の発展期

以降、一九六十年代半ばからの振興策等で、与那原の幼稚園は少しずつ発展期へ進みます。

思い出の中の与那原駅 軽便の車内事情

七〇年前、戦禍によって失われた沖縄軽便鉄道与那原駅。平成二七年駅舎資料館としての復活を記念し、戦前の駅を利用した御三方から、過ぎた日の思い出を伺いました。



小牧清子さん (昭和5年生)

具志堅貞子さん (昭和5年生)

小牧清子さん (昭和6年生)

—朝の駅と車内はどんな雰囲気でしたか？

具志堅…私以外の二人は通学で利用していますね。

諸見里…私たちは定期券を使って通学していました。

小牧…私たちが通学で使う区間は、与那原から古波蔵駅で嘉手納線に乗り換え、安里駅で降りました。

諸見里…県立第一高等女学校（一高女）は現在の那覇市安里にあったんです。一高女と女子師範学校は併設されていました。私は昭和一九年から、小牧さんは一八年から汽車で登校していました。

具志堅…始発は朝六時四〇分位でしたかね。

小牧…朝の駅は、勤め人と学生でいっぱいでした。

車両によって乗る人がだいたい決まっていますよ。一両車は男子学生とお勤めの方。二両車は二高女や積徳学園、商業の女学生。三両車

は私達で一高女や女子師範の女学生です。

諸見里…始発の与那原でもう車両はいっぱいですよ。座席に座れないくらい人が乗っていました。

具志堅…与那原は一高女が多いから、始発で占領されるんでしょうね。

諸見里…朝の列車内は、座れば本を読むこともできましたよ。

諸見里…今の満員電車のように、ぎゅうぎゅう詰めになることはありません。

小牧…私の頃は、宿題のかわりに裁縫の課題が出たんです。近所のお姉さんは、間に合わなくて汽車の中で縫っていましたね。糸が長いので、私が糸を持って手伝うんです（笑）。

諸見里…そんなに乗り心地は悪くなかったですよ。線路の上なので、現在のバスより良かったと思いますよ。

具志堅…一日橋を通る時だけは音が違いましたね。ニーブイしてもそこで起きるんです（笑）。

小牧…車内は今のバスの車両よりは広かったと思います。

具志堅…座り心地は上等でしたよ。つり革や網棚もありましたよ。



沖縄県鉄道 学生定期券 (加田芳英氏所蔵) 昭和9年7月17日 那覇～安里

小牧…車両の両側にソファアがあり。まず。本土の電車と同じ作りですね。先輩がいつぱいの時に乗ると、下級生が「どうぞ」と立つんですね（笑）。具志堅…立たないと大変ですよ（笑）。

解説

「二高女」正式には「沖縄県立第一高等女学校」と言い、戦前の、女子中等教育機関です。一二歳から一七歳までの女子が在学しました。「女子師範」とは、女性教員の養成学校です。

小牧さんや諸見里さんの様に、与那原からたくさんの学生が汽車で通学していました。